

## 数字で読むインドネシアの都市化

高橋 宗生

インドネシアの二〇一〇年人口センサス結果がウェブサイトに掲載され、利用に供されている。同サイトのスタートページ (<http://sp2010.bps.go.id>) には、経済・社会状況を読み解く三種類の主要統計指標が表示されており(二〇一三年五月七日最終アクセス)、そのなかに都市化の状況を示す指標がある。それは都市部人口比率四九・七九%、農村部人口比率五〇・二二%というほぼ拮抗した数値である。本稿では、インドネシアの統計書で「農村部 rural」と対照させて用いられる「都市部 urban」の定義とその割合の変化を追い、いくつかの統計数値を使って同国の大都市圏の紹介を行いたい。

都市部人口比率の算出方法は国ごとに異なり、単純な比較はできない。以下、インドネシアの事例をみていくことにする。

独立後最初に実施された一九六一年の人口センサス(以下、センサスと略)では、最小行政単位である「デサ」や「クルラハン」など数万の行政村(二〇一二年六月末日時点では七九〇七五)が、①自治体の一つである「市」のなかに位置する、②県庁所在地に位置する、③非農業従事

者が全体の八〇%以上を占める、のうち一つを満たせば都市部とみなされた。続く一九七一年のセンサスでは、前回の三つの基準に④全体の半分以上が非農業従事者であると同時に、三つの都市的施設(病院・診療所、学校、電気)を持つ、という項目が加わり、その四つの基準のうち最低一つを満たすことが要件となった。

一九八〇年センサスでは①人口密度、②農業従事世帯の割合③都市的施設数を二〇段階に分けてポイント化し、二一ポイント以上を得た行政村と、一九が二〇ポイントを得ると同時に都市部とみなされた一番近い行政村から五キロ以内位置し、発展性を持つと評価された行政村が都市部とみなされた。この基準は一九九〇年センサスでも適用された。

続く二〇〇〇年センサスでは、人口密度と農業従事世帯に関してそれぞれ階層区分値を変更した八分法が採用された。同時に、都市的施設(幼稚園、中学校、高校、市場、商店街、映画館、病院)へのアクセスの便利さが勘案され、行政村自体に施設がなくとも、各施設への距離が条件を満たした場合もポイントを得ることが可能となった。これらを合計した

ポイントが一〇以上であればその行政村は都市部と定められた。二〇一〇年センサスでも、その基準がほぼそのまま踏襲されている。

このように、複数の基準をあてはめて算出された都市部人口のパーセント値は、一九六一年一四・八、七一年一七・四、八〇年二二・四、九〇年三〇・九、二〇〇〇年四二・四、二〇一〇年四九・七九と右肩上がりで上昇していった。

さて、最初に触れた二〇一〇年センサス結果には、州ごとにその領域に位置する県・市の都市部人口の割合が掲載されている。インドネシアにはその時点で一〇〇万人を超す大都市が一存在していた(表1参照)。五〇万人以上で一〇〇万人未満の都市も一五を数え、全般的にみてこれらの大都市に隣接する県・市の都市化は特に著しいことが統計数値から読み取れる。

自治体としての市の領域を超えた大都市圏の決定基準、範囲、名称は様々であるが、なかでもよく耳にする四つの大都市圏における二〇一〇年時点の人口数をセンサス結果から拾ってみよう。

まず、ジャカルタ首都特別州を中心に一〇市・四県からなるジャバデタベック(首都大都市圏)は、総人口二七九六万人を擁する。続くグルバンクルトスシラ(スラバヤ大都市圏)は、二市・五県からなり、九一

二万人の人口を抱える。バンドン・ラヤ(バンドン大都市圏)は二市・三県(一県は一部のみを含む)からなり、人口は七八九万人を数える。ジャワ島外にもいくつかの大都市圏が存在するが、メダン市を中心とするメビダン(メダン大都市圏)がよく知られている。二市・一県からなり、人口は四一三万人である。

当図書館では、インドネシアの都市化を数値で追うための統計や、行政村単位で自治体の合併・新設状況を確認できる行政区画図を多数所蔵している。ご利用をお待ちしている次第である。

(たかはし むねお/アジア経済研究所 図書館)

表1 インドネシアの100万都市

順位	都市名	人口(万人)*
1	ジャカルタ首都特別州**	961
2	スラバヤ市	277
3	バンドン市	239
4	プカシ市	233
5	メダン市	210
6	タンゲラン市	180
7	デボック市	174
8	スマラン市	156
9	パレンバン市	146
10	マカッサル市	134
11	南タンゲラン市	129

(出所) 筆者作成。  
(注) \* 1000人以下は四捨五入。  
\*\* 行政上は5市1県からなる。